

バスト ス 週 報

第三四七号
昭和卅一年
十二月二日
発行
DIRETOR
KOITI MORI
REDATOR
SHION ODA
RUA PRES.
VARGAS 188
C. P. 112
BASTOS
C. P.
一ヶ月
100円

断想 片々

土壤改良

ブラジルの旧地帯というところ開拓当初に
かに良い土地であつても、十年二十年つ
くりあらして瘠せ放題、作物がとれなく
なると繁獲の如く放棄されたものの代名
詞である。

新興地！新興地へと人々は流れて行き
作りあらしめて棄てた土地は、カポエイラに
なるかバストに出世するのがせい一は、い
斯くてサンパウロ州は、その一部を除く
と殆んど隅から隅まで、すさまじき旧地帯
の様相をおびている。

わがバストも御多聞にもれず、戦前
近は蟻のあまきにつくように密集し、移
住地の周辺を合入で一万五千アルケル
の土地に、内外人約二千家族が競つて、棉
作に全力をあつた。一九三三年頃からは
年六十万七十万八十万アルロバと鱈上り
に生産が上つて、たから恐ろしい。それ
が余り上頂のテラでない上に連作をや
つたので、一九四〇年頃からは衰退の路を辿
り、いつの間にか綿作の中へは奥入りス
クへ移行してしまつた。

疲弊したバストがここには、養
鶏の村として興生したが、土地に対する
人々の関心は、だんだんうすれていくよう
であつた。バストを更新させるには、幾
多の新作物を取り入れ、新農法を取り入
れることの必要は、先づ土壤の改良を計
らねばならぬ。これに、更なる改良の計
算格を失つた土地は、之れを更なる改良す
る方法を講ずることによつてのみ再生の
途が開けるのだが、養蚕養鶏で利益を工
つた次の段階では、農地をいかに肥沃なら
しめるか、真剣に考えねばなるまい。島
取県には、何百アルケルという砂丘があ
るが、近頃之を片端から征服して農地とな
し、西瓜其他漠大な産物をあげて、いと
いう、努力も必要だが、農業の基本智識が
必要なことは、日本でもブラジルでもかわ
りはない。

2 流転の人生に文化は興りない

生活資金を得る為めに、働くことは当然
だが、オロコアランコを追うて奥地へ奥地
へと入りこむ車の群を見ると、アメリカ
映画の「黄金狂時代」の人々と一脈通ず
るものがあるを感ずる。さちがいのよう

ALFAIATARIA IMPERIAL

少々ランボウニキテモ
カタノ
クツレ
ナイノガ
マルヤマ
ノフク
タネ



丸山洋服店
R. PRES VARGAS

わ かの せ と

WA KA MO TO

ボグダチハケンコウナ、
タイヨウゾグ デス

シゴトモヨクスルシ
カラダニモキヲ
ツケマス

大わかもと
党デス



暑い時は胃腸が弱ります
「わかもと」の用意
お忘れなく...

製造元 東京わかもと製薬株式会社

になつて棉を作る。もうかる時もベルボ
オる時もあり一勝負一勝負と張つて夢を
追つている。新興珈琲地帯にもいくらか
そういつた匂いがする。霜にやられたり
セツカにやられたりすると、十里血なす
くさし新戦場の感慨をおぼえる。

腰かけの農業では住居に金はかけられ
ず、荒涼殺伐の生活を余儀なくされ、生
活を苦しむ。こゝが多岐にわたる「生
の境地に浸らざるを得ない。

教百車々音、インカヤユカタンは、大
術を地上にのこした。彼らの文化生活の
高度は知るよしもないが、彼らの生活に
芸術を創造する光明のあつたことにはた
かだ。彼らに定着する郷土があつたこと

を証明する。芸術的天分豊かき同胞が、
ナンノ地を探して東奔西走の旅。はてな
き人生の旅をつづけていくが、流動する
人生に文化は興らない。さびしいことだ。

3. 仲よくやっけて居るのだろうか

「ごたごた」というものは、にも絶えぬ
のら〜い。バスト内ではお互いが仲よ
くいつて居るようでは御同慶に堪えない。
首をうつる人のそれは元行つて足を引く張
たという話をバストでは聞きかぬ。
何とかいう出荷組合の向うを張つて、何
とかいう同業の商社を作るといつて奔走
したのは、あれはよその話、西氏榮送の
カミニオンを市外で立ちふせして荷の争
奪をしたのが車の争奪をしたのか、よそ
では、そういう見でもない同胞、めクイアイ
がある相だ。所詮自分だけ「もうけよう」
の心強れば、共存同業は一片のアホカラ
狂の如きもの。
バストを今より更に一段とすべての
点でよくしようと思へば精神的な面とし
つかり協和しなければ、だめだろう。組
合の中にその組合の不為めになることを
策動する分子が居るとすれば、どうであ
ろうか。

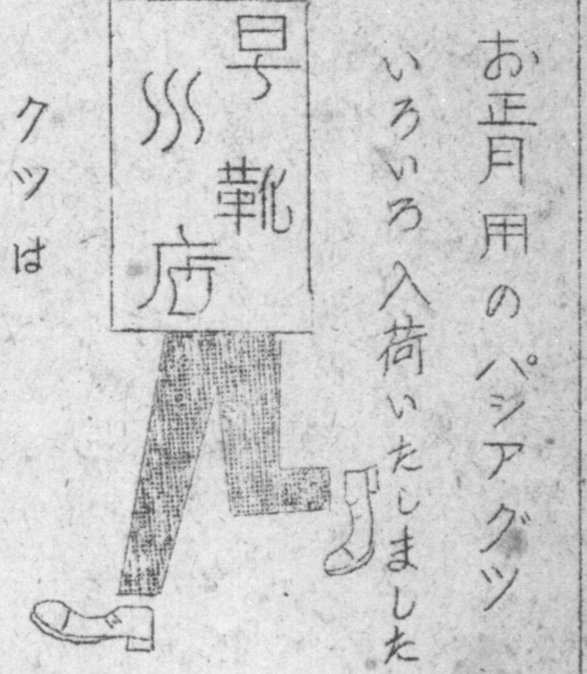
4. 親切なお医者

ラジオの日本語版をきいてゐると「オ
ランカ汽船の〇〇号何万吨の豪華船
お食事はずはらしい日本料理、親切丁寧
に日本語のできるボーイさんがおせわを
いたします」という声がかきこえる。その
声のウラから、ルイス号とかいう船の船
医が日本人船客の病気を看ないで、死に
到らしめたとかで連日新聞を賑わしてい
る。広告料をきつて天下に放送してゐる
手前何を言つても天下御免だなどと云わ
れ、「親切でいいねい」と褒めたりもする
ので「オランカ汽船」にはシンセツな船医
がのり込人で皆さまのこけんこうをみま
もつていきます」といつたらどうだろう。

5. 病氣するな お医者居ないぞ

病院にお医者様が居なくなると、とた
んにあちこちで病人がなのりを上げだし
た。ツパンから野口ドクトルに來てもら
つたり又はこちうから出かけた。中々
ひんぱんである。
とところで、招いたり出かけた。でさる
経済力のある人は、それによいとして、医
者が遠いとおつくりになりがちで、
みてもらいたいと思つたり、とつおいつ
じてゐる内悪くなつてしまつた例もある。
病院を再開する為めにバストス人の
を結果して一戸四軒毎月負担覚悟
をしたけれど、こんとはお医者がない
中々思うようにならぬお医者さんと誰へ
ともない怨嗟の声。(未音)

SAPATARIA HAYAKAWA



お正月用のパシアクツ
いろいろ入荷いたしました
クツは
早靴店
早靴店
早靴店



モシリキョウ
コントラバス・スタイルとは？

今年のミス・ユニヴァーシスの各地方区代表は
全体として、バスト(むね)が目立って発達
し、ヒップ(おしり)と同じ位の幅になり、ま
ん中のウエスト(どう)との差がひらいて、そ
のシルエツトが、ちようど楽器のコントラバ
スのようにボリューム(量感)があったので
この名が来た。

しかし外国の肉體女優にはコントラバ
スのスタイルは昔からのつうしくなく、河
の女」のソニア・ローレンはバスト92、ウエスト
64、ヒップ89、インチ、OKネロのシルバート
バンパニニが94、61、92、コントラバ
ス。いかにも三つの数字が大体3-1-2-1-3
の比になつてゐる。
と、ところが日本女性には平均82、62、92で
バストが概して貧弱。ミス・ニッポンの伊
東絹子は86、61、92、高橋敬子には87、
56、92、バストは平均以上だがまだまだ
というところ。
それが今年のミス・ユニバーシス日本代表選
の五十名の娘たちの平均を見ると、89、57
、91、6、とくに日本代表になつた、馬場
祥江などは96、60、95と完全なる1-2-1-3
の国際級コントラバスだ。
コントラバスと並ぶと八頭身もすむに
オールド・ファッションー、さりとはこわい。

萬年筆をおとした人

心あたりの方は、おいで下さい
新らしくはないが品は上等のもよう
です

週報社

まで

酒のみへ警告

ベロベロに酔って相手を刺して... 而も悪罪... 日本よいくにトラのくに

「酒の上のことだからと、なんでも大目にみたがるのが日本人のクセ、日本は酒のみの天国だ」
京都地裁小田春雄裁判長は、自分か判決を下した殺人未遂男に対する判決理由の中で、こう述べて法の改正を力説し、大きな問題を投げかけた。

梅雨の街
昨午六月十七日は降りみ降りみ降らずの梅雨が京都の街をしつぽりぬらしていった。中京区西ノ京月光所、会社員吉瀬晋一郎33は勤め先の大改東区谷町三丁目、みのお水道工業所に工事の引続きに行く為め、おひらき過ぎに自宅を出た。経営主の木村伊三郎さんと折合いが悪く、前日酔表を出していった。

とにかく気がくしゃくしゃするので行きつけの道所の飲み屋「松月」に顔をつっこんだ。酒は上戸で、酒を四合ほどの人だがもの足りず、近の質屋へ上着や手提をよけて三百円借りた。
この金でビール一本とまたドブ酒四合ばかりあつた。た、相客と外へ出で雨の中で相撲をとりにトロンコになったところにはもう意識はスウロウとなつていた。

おしらせ

AVISO

コレトリア エスタドアル
からの おしらせです
地租 *Jempale de Formosa*
一九五六年度の未納分
十二月十五日迄に納付しなさい
期限はソパンに廻付され、事めんどうに
なります

夏休みを利用

リース編み(不式)

を習いましょう

夏は涼しいリース編み

冬は毛糸編み

手あみ ござほうの方には
手あみも お教え致します

シネマカン マエ (寄附金あり)

梶山米子



フラフラと自宅に戻りアイクチを持ち出して再び「松月」へ出かけ、そこで飲んでいた相客にふざけて抱きついた。「なにやコレ!」ワシは女と違うでお前相客も酔って、お前の女と違うでお前になんかお前とはなんや、お定まりの酔飲み屋で珍らしくもない、お定まりの酔いらいのケンカである。コッパがどびイスが壁にぶつかると、トラの昔瀬ケンケンカ相手の内の右京区山ノ内五反田町、禅業中藤相次さん47の胸をアイクチでぶすりどやった。中藤さん一突きでクツクツのびた、口々骨を坊り胃袋に達するニッ月の重傷を負った。こうしてトラの昔瀬ケンケンは京都地裁から起訴され小田裁判長係で審理の道がわかれた。

公判廷で立念いの金井塚検事は、「このような犯罪を蔽罰にしなればは、秩序が乱れ社会的不安は除かれな」と激しく論告して、懲役五年を求刑した。之れに対し、表権七弁護士は心神喪失中の犯人だと主張して精神鑑定を請求した。この事件のように、酒の上のケンカがら人を殺傷して、精神鑑定の結果悪罪となつた例は少なくないのである。

例1、小田裁判長は去る八年十月にモウイスギ三合を飲んで通行人とケンカして出刃包丁で刺し殺した学生27に悪罪を言い渡している。
例2、また同じ京都地裁渡辺裁判長は同年五月に殺人罪に問われた被告に悪罪の判決を下した。元、刑事補償十万余円を給付を決定したことがある。
例3、同廿五年の暮に、街場40の首をねささのヒモでしめ、火パンで胸や腹をねつた突きこいで殺したというむごい事件。被告の文具商引は懲役十五年を求刑されたが、京大法医学教室小南伝土等専門医三人が「酒を伏山飲んだための心神喪失だった」と鑑定したため無罪となり、大改高裁でも控訴棄却となった。

例4、最近では今年の五月十八日に同じ地裁の石原裁判官がメーデーの祝いの酒によつて、ケンカ相手の頭をクツクツに、ニッ月の重傷を負わせ、電気工24に七分後、酒をのつてしむように、とさとして無罪を言い渡している。

警告 鐘

酒の上なウ人間の一
人々二人や、ついで
もいひの、早が、
んしては、いけませ
ん。ここは、フレンジル
です。

と、こので、ドブ酒を
八合もの、人だ、勢で
ケンカ相手、をアイ
クチで突き刺した
トラ君、頼ク、モ、

京大医学部精神医学教室で鑑定を受けた
三浦百重教授は「急性アルコール中毒によ
る意識コンタク状態」と鑑定した。
検事の要求で小田裁判長は再鑑定を命
じたが二度目に吉瀬ケンケンを診た同教室村

上仁教授も病的メイライによるモウロウ
 状態の衝動的行為と診断した。
 二つの鑑定書は去瀬が犯行当時は酒に
 よる心神喪失状態だったことを科学的に
 立証したのである。
 刑法は精神障害のために物事を判断す
 る能力を失っているもの、つまり心神喪
 失者の行為は罰しないこと、またその程
 度が少し軽い心神弱者は減刑すること
 を決めてはいる。酒をのんで酔っている者
 もこれに当てはまるわけである。
 七月六日朝、小田裁判長は去瀬にだけ
 り無罪を言い渡した。だが裁判長は判決
 の中で、次の要旨の理由を述べて法の不
 備を鳴らしたのである。(以下次号)

市会議員十一月出席表

バストス市議連はどんなに
 勤勉であるか、ごうん下さい

全出席4回 日未六人、純伯一人
 流会に不出席のは日系市議の努力による

議員名	出席回数
本席	4回
第二書記	4回
書記	4回
議長	4回
第一書記	4回
第二書記	2回
書記	1回
書記	4回
書記	1回
書記	1回
書記	4回

議会の日	議会の日			
	dia 4	11	18	25
Amilcar Rocha	-	-	-	-
Antenor Vieira de Sa	-	-	-	-
Atsushi Taniguti	○	○	○	○
Hirayuki Kobayashi	○	○	○	○
Mamoru Taroda	○	○	○	○
Mizuko Ikeda	-	-	-	-
Paulo Seiji Zakimi	○	○	○	○
Tokoru Nishi	○	○	○	○
Wilson Falemon B.M	x	○	○	x
Clavo Salkes	x	○	○	x
Arthur Mo dro	○	○	○	○
João Batista Nogueira	○	x	x	○
Augusto Henrique	○	x	○	x
Reimon Sato	○	○	○	○

氏名	政 党 別	補 員
Amilcar Rocha	PTB	Diplomado
Antenor Vieira de Sa	PTB	"
Atsushi Taniguti	UDN	"
Hirayuki Kobayashi	PDC	"
Mamoru Taroda	PDC	"
Mizuko Ikeda	PSP	"
Paulo Seiji Zakimi	PDC	"
Tokoru Nishi	PDC	"
Wilson Falemon B.M	PTB	Suplente
Clavo Salkes	PTB	"
Arthur Mo dro	PDC	"
João Batista Nogueira	PSP	"
Augusto Henrique	PTB	"
Reimon Sato	PSP	"

Junio Perito
 José Andrade
 Wilson Higashi
 は 除 名
 は 辞 任
 は 辞 任



日本の
大丸大和
 西瓜種子

（商品として最上の品種です）
 バストス・スイカの名声は今や天下
 の絶品として称讃を博して参りました
 ○良いタネを選びましょう
 毎年好評をいたたいて居ります特選
 種、大丸大和西瓜の「タネ」予約を
 願います。多少にかかわらず御申込
 み下さい。

植木種子物店

アデマール バーロス街

ご注文第一回メ坊 本年十二月末日
 当店配給の種子を、まだおまきになつた
 ことのないお方は、不安にお考えな
 さいませう。ご近所の方ノウ
 エキのたねは、どうか？」とおたがね
 下さい

バストス短歌会報

バストス歌会では十一月十八日第七十
 二回月例会を山本一男居に開き、出席八
 名投稿一名の作品互選をし、左の如き成
 績を得た。
 得点 藤和枝、枝美、狭羊鈴、千エ、げやし、
 熊狐舟、以下畧
 （作品は一首宛高ポイント）

この土地に心組みて暮るる夕
 宵待草の白きに佇む
 親睦の会なれば座の賑へど
 霧散なる吾に寄る人もない
 語ること皆古びる思ひの
 妻と並んで冬陽に座し居り
 電話局や、よく出来しこの町にて
 交換手が四五日話題にのぼる
 お茶碗を割りし芽をなぐさめつつ
 九オの姉はバンソウコウをはる
 終業のベル鳴る頃か施盤の
 工作物に西陽燿ひつ
 送り来し孫の寫真を囲み見る
 面ひさしめてピアノ弾きあさる
 泣けうれて日を経てお茶色に
 なりつく末だしるく匂へり
 冷たき爪癖の如くに夜々を吹き
 真夏といふにセッカの兆

山本和枝
 森重枝美
 森重羊鈴
 渡部千エ
 土井げやし
 浅田狐舟
 吹本菊子
 重道千代子
 山本一男

今週の偶感

洗 腦 子

3

べつに読む気持でもなくセガレのケル
ッホ一年の本の頁をめぐって生来を作る虫の
ツギデセーダと書いて生来を作る虫の
説明がカンタンにしてあった。吾々にし
て見れば養蚕なる産業は日本人コロニア
に限られて居るかに考えていたのだが、
こうして初等科の教科書にまで出てくる
のを見ると吾々の方が認識不足も甚だし
いとしか思われない。

「燈台もとくらし」というか、こういっ
た事柄がバストスにも数多くころがって
居て、向うばかりながめ農村青年諸君が
大分損をされている様に思われてならない。
もののたよえに言うのだが、バンネイ
ランテス産業組合の種鶏場を見学して場
長の浅井技師と意見の交換をして見た人
が何人居るであろうか、或は大野養蠶場
を訪れて大野氏の養蠶経営について何こ
とかを尋ねて見た人が何人居るであろう
か。アラ柘製糸などの直営原蚕飼育場を
訪ねて自分の養蚕飼育の向上を計ってい
る者が何人あるであろうか、もつとも見
に来てもらっては迷惑だと云われるかも
知れないが、こういふ処を一度も覗い
たことのない人も存外多いのではないか
と思ふ。

立派な大農場を視察する事は勿論必要
ではあるが、自分より一歩先行して居る
人の経営が最も今日の手本になる事は云
うまでもあるまい。
青年諸君にもつとも手近なバストス農
業の手本を探求されることをのみ、そ
れによつて自己の産業の向上を計ってい
たいと度々と思ふ。吾が村を知ることは
吾が村の産業を知ることであり吾が村の
地情を知ることもと考ふる。

一寸くどくなさるが、十幾年も前のこと
で本の名も忘れたが、信州の山奥の老農
夫がとうとう海を見ずして、ありせへ行つ
たと書いてあったのを思い出した。別
に珍らしいことではないが、日本が島国
である故、わざと面白く書いたものであ
らう。不思議といえは不思議でないこと
もない。そこで話は書き出しに戻るが、
「あかいこの村」に育つて居るが、存外
ビョウシヤセーカを知らない子供連が多い
のにかんがみ、所住いの父兄連は機会を
与えて「養蚕見学」くらいさせたい。

いただき度い、一寸した養蚕智識が子供
の将来にとつて決してバカバカしい事に
はならない筈である。
戦後日本に於ける初等科の教育も、さく

ところによると、できるだけ「見せる」
「聞かせる」と云ったところに重点をお
いていると思う。
「わたいや蚕の村バストスそだち
絹をはく虫、まじしらぬ
では一寸困ると思ふです。」

移 転 御 挨拶

古 賀 茂

私こと此の度、家事の都合によりサ
ンパウロに移転することになりました。
御存知のように一九三五年御当地に
木造シネマ館を建て、次いで現在の
レンガ建に移り今日に及びましたの
で私のシネマ営業も二十余年余りの長
い思い出となりました。その間私と
致しましては御当地の皆様にご楽の
方面を委せて頂いたことになり、多
少のお役に立ちました伏し、池面で
は尠からぬ御愛顧を受けました次第で
ございます。過般、清家谷口御両所と
商談がまとまり、シネマ営業を悉皆
御譲り致しましたので、どうか此後
は私に御寄せ下さいました以上の御
厚誼を清家谷口両氏に賜わります様
伏而御願ひ申上ります。

尚出發に際しては御饒別等の御恵与
に預りありがたく存じます。一々御挨拶
にも上りかねますので紙上を以て
以上御挨拶に替える次第でございます。
皆様の御健勝を祈り上げます

一九五六年十一月廿一日

出発にあたり 古賀茂

バストスの各位様

ナタール 年末年始

御贈答品入荷

諸物価は騰上り、貴金属類も目のでるような値上りですが、日頃の御愛顧に酬う為め

値上り以前の大安値で

大勉強特別破格にて

差上げます

襟止 メガネ新型

首飾 メガネ新型

男女腕時計

オメガ・ケルト

エスカ

宝飾入

ユビロ



ホント前

R. FRES VARGAS, 365

高田時計店

新旧移住者

こんばんはくわい

去る十一月十五日正午よりコチマ倉庫階上で新旧移住者三十名会合、三時間半にわたり種々の問題を討議した。この値しには最初からテーマがなく、出たとこ勝負というところで司会を引き受けた本田正雄氏。このかた話を引出さうと苦心惨闘の態であった。がさすが此の道のベテランだけあり、うまいとニキツカケを作つて一人々々にしやべらせ、傍聴の畑中市長、旅行中親を出した西イナオ、新妻土木村ドリルなどにも一席ずつ所望して遂に堂々たる座談会にでつちあげてしまつた。本田司会の功たるや正に文化勳章ものである。

ところろで旧移民のことをマカコベリヨといふが、これはそれ程情しみや悪辣な意味をふくんで居らず、むしろ愛嬌を含んだよび名と思つて、僕らのようにもうバストス開植以来の住民マカコベリヨの立場から見るとです。ね、なと自称する。それなら新来者のことをマカコベリヨといつても、さして無礼にはなりぬであらう。がまだそう、新移住者などというよ

JORNAL "O ESTADO DE SAO PAULO"

オ・エスタド・紙

最も權威ある日刊紙、読者は養蚕家の皆様によろこばれる大型紙です。役に立ちます。

此の十二月で前金坊れとなりますから引つづき、ごうんの方、その旨御申込み下さい。新読者も格とよい機会です。すく御申下さい

特約店

バハールホンボ

守越商店

カルクテ

ハキゴコチノヨイ

草履

卸小賣



卸値ハ特ニ勉強イタシマス

パンネランテ組合

神化場ノサレ上

カンホスオレス街

菅原

マカコベリヨの方、親しみがあつて、い、ノ、ホ、ボ、だ、け、で、は、何、の、こ、と、や、ら、判、り、ぬ、上、に、マ、カ、コ、が、つ、か、ぬ、と、い、け、な、い、。、ど、う、せ、ゆ、く、ゆ、く、は、い、や、で、も、マ、カ、コ、に、な、る、ん、だ、か、り、し、ん、ほ、う、す、る、と、て、在、工、合、を、善、良、な、マ、カ、コ、ベ、リ、ヨ、に、な、る、指、導、み、た、よ、う、な、空、気、も、幾、分、感、じ、ら、れ、な、い、こ、と、は、な、か、り、た、。

マカコベリヨの方々に幾分減れはあつたが三十四、五名へ案内状を出したが實際の出席は一言に充たさず、且つホンラン組は連日谷口会長の好意で車を迎いに、い、つ、て、もう、い、五、名、も、出、席、さ、れ、た、。、尤、も、着、伯、草、々、また、日、位、に、も、が、な、り、ぬ、人、は、案、内、を、受、け、つ、て、い、い、合、合、へ、親、を、出、し、て、お、く、と、向、後、何、か、と、マ、カ、コ、ベ、リ、ヨ、と、懇、意、に、な、り、決、り、て、損、は、な、い、の、だ、が、今、日、の、処、は、出、足、が、お、わ、る、か、つ、た、。、ベ、リ、ヨ、組、は、更、に、出、足、が、よ、く、な、く、つ、た、。、い、だ、つ、て、昼、寝、を、む、さ、ほ、つ、て、い、た、こ、と、だ、ら、う、。

「どんなことか、口火をゆるか」と本田司会がいう。「ええ、か、い、ん、な、と、こ、か、ら、始、め、て、く、れ、し、ム、セ、キ、ニ、ン、な、返、事、に、司、会、は、で、は、自、己、紹、介、か、つ、始、め、ま、し、よ、う、。、ふ、る、い、人、か、う、と、い、つ、て、。、時、間、を、か、せ、さ、始、め、た、。、マ、カ、コ、ベ、リ、ヨ、組、に、は、四、十、年、以、上、に、な、る、人、も、居、り、三、十、年、は、ザ、ラ、と、れ、も、お、尻、に、コ、ケ、の、生、え、た、人、は、か、り、で、あ、る、。

太郎田商店の

ホナンザグラム

よその□は知らぬが、西□が上
 □□、それはかりか高値が□
 針を扱すとすると□□□□の□
 気は□□的の上□□といわねばなる
 まい。これでニュー□□□□の
 □さえなければ鬼に□□さ、東
 年のことをいうと□□が□うかも
 知れぬが、あ□に□□って一つ
 □□としやれこもうじやないか
 □□□□□□

私が余り泣きごとをいうので、友だち
 の同じきりのつよいのが、わたしをはげま
 すつもりで、こんな手紙をくれました。
 よめそうの中々よめません、とうか□
 字の中へ適宜字を入れて、よんで下さい
 ませんか

○回答メカ 十二月十五日 発表新集
 号。○整理の都合上別紙に於いて
 オフロクレススタ宛お送り下さい
 ○賞品正解者三名太郎田商店より……
 ○前回選国ミヤケ十二月九日メカ
 発表十二月十六日号

農事講演會おしらせ 来聴歓迎

日時 十二月二日 正午開会
 場所 バストス 産業会館
 主催 連日、縣青
 後援者 産業組合 及 通報社

おしらせ
 来る十二月八日夜八時より
 城信支先生の 産業会館にて
 講演會

あか 豊かな心
 いこら 明るい心
 かんたい 寛大な心
 へいわ 平和な心
 (谷口雅春著「真理初学篇より」)

木村ドトール

病院視察

去る十一月廿五日西勤法学士同道でソ
 ロ線マツシヤド取木村医学士が来植、病院
 を視察された。バストス病院は壁はおち
 ユカははがれて居ると世間で取りざたし
 ているので、見に来たら中々立派じゃな
 いかと意外なおもちであつた由、さく
 ぬによると日本語も中々達者で人格高潔
 なお医者様とのこと、こんな人が来て下
 さりや申ふんないのだが、またくるとも
 何ともその辺は不明の由。(ちっとくら
 さぐりをいれじやにて)

第二回ホナンザグラムの回答

姉はもう嫁入して三人の団持だ。
 困の雪子もいよいよ語が決つた。
 とところで三三三のことでだ、太郎
 田で三三三を十回賦で興れる
 そうだ。團一つ申込んで置いて
 くれぬが、パラパンの因より
 正解者 ミンコシさん、ツパン吉田さん



養雞点燈用

モトール四HP

ニキロワット発電機付き

右格安に売却 御希望の方は
 バストス産業組合事務所内
 招 本 道

NOSSA RELOJOARIA
 AV. TAMOIOS 785 TUPÃ



ナタールの
 プレゼンテには、
 当店の ガネット、ユビワ
 トケイ、メサマシ
 其他手頃の品
 をおえうび下さい

トツパン市 アベニータ
 タモヨセ八五
 ノッサ時計店

Os caes, mais apressados ou mais ligeiros do que nós, foram os primeiros a entrar na cabana e rebolaram-se sobre o solo enxuto, na poeira ladrando alegremente. A nossa satisfação não era menos viva da que a deles, mas manifestamo-la doutro modo, sem nos rebolarmos pelo chão; o que, no entanto, não teria sido mau para nos enxuarmos.

Uma casa como a nossa a lenha não era muito difficil de encontrar, cre só tira-la das paredes e do teto, isto é, arrancar remos, aos molhos de lenha e de cavacos, tendo o cuidado de tirar esses ramos daqui e d acolá, de modo a não comprometer a solidez na nossa barraca.

Isto depressa se fez e não tardou a brilhar uma chama clara crepitando alegremente por sobre o nosso lar. O nosso amo era um homem de precaução e de experiencia; pela manhã, antes de eu me levantar fizera as suas previsões para o caminho: um pão merendeiro e um bocadinho de queijo; era occasião de ninquem se mostrar exigente ou difficil; por isso quando vimos apparecer o pão, fizemos todos um movimento de alegria.

Infelizmente, os quinhos não foram grandes e pela minha parte tive uma decepção bem desagradavel; em lugar de pão inteiro, meu amo deu-nos só metada.

- Não conheço o caminho, disse ele, respondendo á interrogação do meu olhar, e não sei se daqui a Troyes encontraremos alguma estalagem onde possamos comer. E tambem não conheço esta floresta. Sei unicamente que esta floresta é muito cheia de boques, e que immensas se juntam umas outras; as florestas de Chaource, de Demilly, d'Othe, d'Aumont. Quem sabe se vamos aqui ficar bloqueados por muito tempo neste cabana? É necessario guardar provisões para o nosso jantar. O ficar naquela pequena cabana não era nada muito horrivel para mim, tanto mais que eu não admitia, que tivéssemos de ficar ali bloqueados por muito tempo, como Vitalis dissera, para justificar a sua economia; a neve não ficaria sempre caindo. A verdade que nada annunciava que ella devesse em breve cessar. Pela abertura da cabana viamos decer os flocos rapidos e cerrados; como já não fazia vento, caiam directos, uns por cima dos outros, sem interrupção. Trembei-me que não tínhamos peo; mas guardei o meu pensamento comico.

- Parece-me que a neve vai comecar novemente, continuou Vitalis, não nos devemos expor na estrada sem saber a que distancia estarmos das habitações, e noite não seria agradável no meio daquela neve; mais vale arbas passal-a aqui, ao menos teremos os pés enxutos.

Posta de lado a questão de alimento, esta combinaçào não era nada que me desagradasse; e alias, ainda que nos pusessemos immediatamente a caminho, não havia certeza nenhuma de podermos, antes da noite, encontrar uma estalagem onde jantássemos, enquanto não era senão demasiadamente evidente que encontraríamos na estrada uma toalha de neve, que não teria ainda sido pisada, seria custosa para se ardar.

O que tínhamos era de apertar a cilha na cabana e mais nada. A neve recomecara havia muito tempo e caia sempre com a mesma persistencia; si-se de hora em hora o tapete que formava no solo subir pelos rebertos novos acima cujos trancos unicamente emergiam da maré branca, que em breve os ia enulir. Mas quando acabou de jantar começo-se a ver apenas confusamente o que se passava de fora da cabana porque num dia sombrio como aquele a escuridão viera depressa.

A noite não fez cessar a neve, que continuou a decer em flocos grossos do ceu escuro para a terra luminosa.

- Dorme, disse-me Vitalis, acordar-te-ei quando quiser dormir por minha vez, porque, posto que não tenhamos nada a receitar de bichos nem de gente neste cabana, é preciso que um de nos esteja acordado para não deixar o lume apagar-se; devemos tomar precauções contra o frio que se pode tornar rigoroso, se a neve cessar. Não precisel que me tornassem a repetir o co vite, e adormeci. Quando o meu amo acordou, já a noite devia estar adiantada; imaginei-o eu, pelo menos; e neve já não caia; a nosse fogueira continuava a arder.

- É a tua vez agora, disse-me Vitalis, não tera mais que fazer do que deitar de vez em quando lenha na lareira; vê, que te arranjel uma provisào dela. Efetivamente estava um monte de lenha ali á mão.

(Continua).--